



中学生の部 最優秀賞

望まれる国際協力の形

阿部 麻里奈 さん
(入谷中学校2年)



私はこの本の題名を見た時、アフガニスタン、イコール、戦争という文字が私の頭の中をよぎりました。この本には、国際協力の形やあり方などが書かれています。

私は、ふだんニュースなどで目にしたり、耳にしたりはしますが、今ひとつ、自分と

はかわりがないような気持ちでいました。しかし、この本を読んでいくうちに、そんな自分がとても恥ずかしくなっていました。そして、自分がいかに無知なのかということとを思い知らされました。

アフガニスタンという所には、町の真ん中に澄んだ色の青いモスク（イスラム教の礼拝堂）があり、広場には数え切れないくらい真つ白なハトが飛び回っていて、青い空に向かって一斉に羽ばたく、本当はそんなすばらしい町なのです。

「未来に続く国際協力を実現する上でもっとも重要なのは、間違いなく戦争をなくすることだと思う。」とあります。私もそのとおりだと共感しました。どうして今、この世の中で戦争が起こるのか、不思議でなりません。戦争で何か得るものがあるのでしょうか。私には悲しき、むなしさだけが残ってしまい、何も得ることなんてないと思えるのです。

ニュースなどで戦争を見るたび、何の関係もない人達が傷つく姿は、あまりにかわいそうで目をそむけたくありません。貧しく悲惨な国ほど、国連や大型のNGOなど、さまざま

まな外国人の援助団体が入っており、そうした外国人を対象とした商売で、その貧しい国の首都の一部だけの人々が潤っていて、貧しい人は物を与えてもらえないのです。国際協力が行われているのに、余計、現地における貧富の差が広がってしまうのは、一見良い事をしているように思える国際協力も、考えるべきだと私は思いました。また、少しだけいい事をして、いかに「やっていきます。」「やりましました。」と偽の援助をする者もいるのです。せつかく真面目にやっている人たちのことを考えると、偽者の人々は最低だと思いました。私が行った募金も本当の貧しい人には与えられてないのかと思うと、とても残念でなりません。日本は、国際協力の認知度が低いので、私たちの知らないことも多くあるのだと分かり、勉強になった事も多くありましたが、がっかりした事もたくさんありました。「援助は利権」という言葉があり、どんな形の国際協力であろうと、多かれ少なかれ、現地の政治家の利権争いにまきこまれ、利用されたりしてしまう事もあるのです。どこの国でも、

やはり政治家は、強いのだらうかと思いました。しかし、そんな政治家には決して負けず、最善の努力をし、利用されることなく仕事ができるのであれば、国際協力のあり方も変わるような気がしました。

アフガニスタンでは、ここら中で麻薬が採れるので、母親が子供をおとなしくさせるために麻薬を使うのです。麻薬を使えば、子供は泣きやみません。このため、母親達は、「伝統的に」麻薬を使って泣きやませるのだそうです。そして子供は退薬症候群になり、しまいには、死んでしまう子もいるのです。私は、信じられませんでした。子供が泣いただけで、麻薬を使うなんて、日本では考えられないし、犯罪だからです。私は子供たちがかわいそうで仕方がありません。将来、子供たちはどうなってしまうのでしょうか。夢や希望、一生を麻薬で奪ってしまうのはいけない事だと、だれもが思ってもらいたいと思います。

世の中には、たくさんの、そして、さまざまな人たちが住んでおり、宗教、民俗、性別、文化など、一人一人違っている人がいることはたしかです。自分とは違う、そんな人々を理解し、分かり合ひ、その国々のすばらしい歴史や文化を感じとれるようになれば、戦争も少しは減るのではないのでしょうか。私はそう信じたいと思います。先進国が、発展途上国に、自分の国のやり方を無理矢理押しつけることのないように、経済援助や、教育援助、医療援助が、現地に合った形で、出来るようになれば良いと心から願いました。本当に意味のある国際協力が出来れば、すばらしい事だと思いました。それには、私たち一人一人がこれから少しずつでも、世界中で起こっているさまざまなニュースや、地球全体の問題に目を向け、考え、世界中が平和であるよう努力しなければならぬと思います。そして何より、宗教や生活習慣は違うけれど、地球に住む一人一人が幸せに笑顔で毎日を暮らしていけるように、心から願う気持ちで一杯になりました。

書名：アフガニスタンに住む
彼女からあなたへ
著者名：山本敏晴
望まれる国際協力の形
出版社：白水社